

誰でも、どんな働き方でも、 誇りをもって働けるようにする ことが労働組合の役割

竹中ナミ

(たけなか・なみ)

社会福祉法人
プロップ・ステーション
理事長

1948年神戸市生まれ。重症心身障害の長女を授かったことから、独学で障害児医療・福祉・教育を学ぶ。1991年、草の根グループとしてプロップ・ステーションを発足、98年に社会福祉法人格を取得、理事長に。ICTを駆使してチャレンジドの自立と社会参画、とりわけ就労促進を支援する活動を続ける。内閣官房雇用戦略対話委員、社会保障国民会議委員、NHK経営委員などを務める。著書に『プロップ・ステーションの挑戦』『ラッキーウーマン』。

「働くこと」で人はつながり支えあえる。働きたいのに働けない人のカベを取り除いて社会参画をバックアップする仕組みが安心社会の基盤になる。では、どうやってカベを取り除けばいいのだろうか。

神戸を拠点に、20年も前から、そのことに取り組んできた人がいる。ICT(情報コミュニケーション技術)を駆使してチャレンジド(障害を持つ人の可能性に着目した、新しい米語)の就労支援を続けるプロップ・ステーションの、「ナミねえ」こと竹中ナミ理事長だ。その設立の経緯から、最近の労働組合との接点に至るまで、たっぷり話を聞いた。

仕事 が 自分のところへ来る

「チャレンジドの就労支援に取り組むきっかけは？」

私の、今年37歳になる娘は、生まれたときから重い脳の障害があつて、丸抱えの手助けが必要だ。彼女を授かつて、日本は、娘や娘のような人たちを、その尊厳を守りながら生かし続けてあげられる国だろうかと考えたときに、すごく怖くなった。ちょうど少子高齢化への一歩を踏み出したころだったが、少子化とは支える人が減るということだし、高齢化とは何らかのサポートを必要とする人が増えるということ。その備えがあるのかといえば、何もない。このままでは、私はこの子を残して安心して死ねない。安心して死ぬためには、娘を支えてくれる人を増やすしかない。そう思って、まわりにいたチャレンジドに「あなた

には重い障害があるけど、働きたいと思つたことある？」と聞いたら、なんと8割が「本当は働きたいと思つている」と答えた。

「働く」とは、自分で自分を支え、さらに社会を支える一員になりたいという意思だ。支えられるだけの存在だと思われてきたチャレンジドが、働く意思を持つていることを知って驚いた。

「だったら、あなたが働くために必要な道具は何？」と聞いたら、「これからはコンピュータがその道具になると思う」という答えが返ってきて、もつと驚いた。「身体が自由に動かない自分たちにも、勉強できる場所があつて、そこで技術を身につければ、自分が職場へ行くのは無理でも、仕事ができるのところに来てくれる。そんな働き方ができるのではないか」と言うのだ。

こういう人たちが働いてくれてこそ、安心して死ねる日が来る。私は、コンピュータなんてさっぱりわからなかったけど、「それやろうよ」と……。

